# 「姉のモノ」

ANE no MONO

ナマムギ工房

# 姉のモノ

## 目次

姉のモノ……3
姉の穴……18
プロフィール紹介……37
姉の日々……38
姉とおれ……41
姉の孔……51
彼のコト……64
姉の欲……70
後書き……86
奥付……87

# 姉のモノ

玄関のドアを開けようとしたら、抵抗と共にガチャガチャと音が返ってきた。何度か試してみたものの扉はかたくなに応じない。数秒立ち尽くし、おれは一人頭を抱えた。

電車の時間は知らせてある。何時にマンションに着くかもメールしてある。というか、ついさっきそれに返信をくれたじゃないか。待ってるからねと言ったじゃないか。

なのに分厚いドアには鍵がかかったまま。こうしていても開く気配はない。あの書きぶりを見たときは流石に半信半疑だったけど、どうやら本気で言っていたらしい。ぞくんと背筋が痺れあがった。

左側を盗み見る。長い通路には人影のカケラもない。午後のマンションは静かな空気で満ちていた。一番うるさいのはおれが息を飲み込む音。震える指先をインターホンへと伸ばす。暴れる心臓が感じ取れた。

『はぁい、どちらさまですか〜？』

ほわほわと浮ついた返事。甘めの声色に目を逸らす。カメラが付いているんだからばっちり見えてるはずなのに。おれを眺め、にまにま笑っているくせに。

「……ハメてもらいに、来ました」

かすれ声は届いたかも怪しい。でもすぐさまガチャリと鍵が開いた。身体一つ分だけドアを開け、逃げるように玄関へと滑り込む。

最初に目に飛び込んできたのはひまわりを思わせる満面の笑み。そして、それを彩る明るい茶髪。鼻孔を満たす匂いに、いや臭いに、おれは慌てて口元を隠した。

「よろしいよろしい、及第点かな」

部屋の主が浮かべていたのは想像通りのご満悦顔。にまにまと笑うたび肩にかかった毛先が揺れる。150センチあるかないかの小柄な身体に男物のYシャツ一枚を羽織り、他にはスリッパしか身に着けていない。ボタンすら留めていないから、控えめな胸の膨らみもなめらかな腹の肉付きも丸見えだった。

丈の合わない袖口はだぼだぼと余って子供のよう。けれど同時にシャツ一枚の無防備な姿は全裸よりも色っぽい。眩しい太ももが裾から覗く。汗ばむ鎖骨や首筋ばかりか、桃色の乳首まで見え隠れしている。

女性にこうもあられもない格好で出迎えられたら、殆どの男はひとたまりもないだろう。なんなら襲

い掛かってもおかしくない。でも、そんなことはあり得なかった。何故なら。

「なんで……もうイってるの？　姉さん」

出迎えてくれた和泉（いずみ）姉さんの股には極太の男性器がそそり立ち、雨上がりの草いきれみたいな湿った臭いをあたりにまき散らしていたからだ。ピンク色の先端から赤黒い竿までまんべんなく濡れ光り、所々に白い粘液が見てとれる雄々しいペニス。陰毛は綺麗に処理してあって、ただでさえ巨大な男根がより長く見える。反り返るモノがおれの視線に答えるように力強く跳ね上がった。

「そーちゃんが遅いからじゃん、待ちくたびれちゃった♡」

快速電車に乗れたって一時間半はかかるんだけど。頭に浮かんだ抗議の言葉は浮かんだだけで消えていく。指二本分では足りない太さ。こんもりと盛り上がった亀頭。女性器をえぐり愉しむために張り出した凶悪なカリ首。太い血管が浮かぶ竿。ひとりでに腿がもじついた。

「ほらぁ、もっかい。ね？」

姉さんの指先がそっと触れ、おれの頬を引き戻す。ぱっちりとした瞳がこちらを見上げる。ところどころハネてはいるけど、柔らかくウェーブのかかった綺麗な髪。蕾のように小さな顔。簡単に折れてしまいそうな細い指。喉を熱気が這い上がる。

「……ハメてもらいに、使って……もらいに……きました」

死にかけの羽虫だってもうちょっとマシな音が出せるだろう。口元を隠して目を伏せて、口にした言葉はあまりに惨め。

「うんうん、よろしい」

にんまりと頷く姉さんは昂るさまを隠そうともしない。顔を背けることすらできず、いまにも肌に火がつきそう。たまらず目を瞑った途端、不意に膝から力が抜けた。

崩れ落ちかけ床に手をつき、おれは思わず姉さんを見上げる。見上げようとした。けど目と鼻の先にあったのは。おれの鼻先に突きつけられていたモノは。

「ナニするか、わかるよね……♡」

びきびきと存在を主張する姉さんの凶悪ペニスだった。嗅いでいるだけで孕まされそうな、涙すら出そうな精の臭い。半開きの口が閉じられない。鼻が勝手にすんすんと鳴る。

肩に両手を置かれただけで弱々しく地面にへたり込んだ。身悶えするほど恥ずかしい醜態だけど、今はそんなのどうだっていい。

「ちょ、やぁっ♡　靴くらい、脱ぎなよぉ……オッ♡」

いきなり勃起を突きつけられてオスの臭いを前にして、一も二もなく先っぽへ吸い付くのに比べたら。そんなの恥の端くれにも入らないからだ。背骨の根元がじゅくじゅくと疼く。

尿道口の周りを唇でくるむと苦味が鼻を突き抜ける。先走り汁の粘つきと塩気。舌に染み入る精液のえぐみ。根元に添えた両手には幹にでも触れているような固さが返ってくる。血潮の滾りが伝わってくる。使い込まれて黒光りする姉さんの分身からは、持ち主の可憐さなんてこれっぽっちも感じられない。

「ぐぅっ♡　あっ、ぞれぇ……いぃっ！」

濁りの混じった喘ぎ声。どちらかといえば汚いそれがおれの目元を緩ませた。舌先で先端をちろちろと舐める。濡らした唇で亀頭を食む。裏筋に舌を寄り添わせ、優しく唾液をなすり込む。練習してきた舌使い。奉仕のたびに貰える反応。息を荒くしモノを震わせ、姉さんが声を漏らしてくれる。それだけで十分どころか身に余るのに、心臓が破れそうだっていうのに。小さな手のひらが頭に触れた。おれの髪を撫でつけてあやすようにさすってくれて。

「フェラ顔、えっろぉ……なさけなぁい♡」

肩を震わせ見上げたおれに降り注いだのはやらしい笑顔。夢中で吸い付く口元を姉さんの視線が舐めまわす。瞳がジンと熱を帯びる。

「おしゃぶりじょうず、かわいいね……おくちオナホ、きもちい……んぅっ♡」

撫でさする手のひらがじりじりと後ろへ下りていく。茎のように頼りない指がツタのように頭皮に絡む。優しくさする手つきから離さないための拘束へ。ボールか何かを掴むみたいにおれの頭を捕まえて。

「チンポ……吸ってぇ……♡」

しどしどの命令。甘い囁き。逃げ道をふさぐ姉さんの両手。へその奥が痺れ引きつる。ぷにぷにの亀頭にしゃぶりつき、おれはなんにも考えられず。熟れた言葉にただ従った。ズボンの中が熱く湿った。

「おぐぅぅぅっ♡　イ……グゥっ！」

声と一緒に頭に響くどぷんと重たい汁の音。えぐみと臭いとイガつきと、渦巻く熱の塊と。卑しく窄めた口内オナホに姉さんの種がなだれ込む。びゅくびゅくどぷりと吐き散らされて、舌の裏まで汚されて。口の端からぼたぼた垂れて。おれは思わず両目を瞑った。下品にしゃぶって啜りつく。特濃ザーメンを飲み下す。

「お……オッ♡　あひ……ひぐぅ、うぅぅ……♡」

激しくっても荒々しくても、結局インスタントな早イキ射精。一気に噴き出しはしたけれど、すぐさまイキ声と共に萎えていく。ペニスを押し込むガニ股もおれを掴んだ姉さんの両手も、痙攣しながらほどけていった。しがみついていたのはむしろ、むしゃぶり欲しがる生オナホで。

「あぁ、もぉ……♡　どすけべぇ……♡」

惚けた声色。ぬるつく亀頭。口中を満たす種付け汁。頭の上から降ってくる仕方なさげな笑い声。ひとりでに姉さんへしがみついていた両腕に、おれは強く力を込めた。

遮光カーテンを閉め切った寝室に姉さんの鼻歌が明るく響く。今にも踊りだしそうな上機嫌ぶりは、仄暗い夜用の照明や漂う青臭さとどこか噛み合わない。けど、おれの目の前に鎮座するベッドを加えてやれば途端にぴたりと歯車が噛み合う。するりと納得できてしまう。掛け布団はフローリングに落とされて、代わりに敷き詰められているのは何枚もの大きなバスタオル。まるでご馳走を並べるテーブルのよう。おまけに部屋の片隅にはさっき剥ぎ取られたおれの衣服が雑に放り出されている始末。五感でとらえる何もかもが、これからナニが始まるのかをありありと思い描かせる。身体を丸めて両足を閉じて、おれはみっともなく股間を押さえているしかなかった。

「こーら、なんで隠してるの？」

背後からの囁きに震えが走る。姉さんの髪が背中をくすぐる。息の湿度が感じ取れた。

「そーちゃんは、ハメてもらいに来た。でしょ……♡」

ぴたりと脇腹に触れた手はおれのそれよりはるかに薄い。背伸びをしながら話しかけられても、姉さんの背丈はおれの肩にも届かない。

逆らえるはずの命令に、いくらでも振り払えるだろう華奢な両手に、おれの手足は言われるがまま。べとつく股間が晒されて。もじつく腿が開け渡されて。肌の火照りも汗ばみも高まっていく一方で。

「えらいえらぁい、素直だね」

あたたかな声色がうなじをくすぐり、子供みたいな悲鳴が漏れた。踏み台に乗っておれへと迫り姉さんはしな垂れ絡みつく。Yシャツもスリッパも取り払い生まれた姿そのままで。背中に感じるささやかな膨らみ。熱気を放つやわらかな肢体。そして何より。

「それじゃ、しよっか。ちん比べ♡」

おれの股間に差し入れられて腿の間を悠々と抜けて。それでもなお、おれのモノより長くて大きなぐ

らぐら煮え立つふたなりペニス。固く滾った男性器。喉からごくりと音がした。
尻の谷間。その奥の肛門。アリの門渡り、ふにゃけた睾丸。程よく反った姉さんの竿は弱っちいオスの股間を容赦なく押し込む。はっきり浮き出た血管が敏感な皮膚を優しく削る。抑え込もうと歯を食い縛っても、こみ上げ溢れる鳴き声はまるで止まってくれなくて。
「今日は、どっちがちんぽかな？　どっちがよわぁい……おちんちんちゃんかな？」
粘っこい言葉を注ぎながら姉さんはおもむろに右手を上げた。おれの前へとぶらつかせたのは片手に収まる黒いメジャー。なんの変哲もないそれに腰の根元が沸きかえる。
「まずはそーちゃんから♡　ちゃんと測って教えてね？」
二つの性器がぴたりと触れ合う。下でびくつく姉さんのモノは、さっきイったばっかりなのに鉄かなにかと思えるほど。バナナのように太く分厚く、孕ませ臭気を強烈に放つ。足が勝手にぴたりと閉じて腰が前後にくねついた。
目の前のメジャーを受け取り、股間にあてがい長さを測る。単純明快、簡単な作業。姉さんの厳命に従って陰毛を処理したおれならなおさら、難しいことなんてなにもない。はずなのに。真っ赤に染まったおれの手は感覚すらもおぼつかず、震えてばかりでやたらと鈍い。まごつくおれを姉さんは急かすことなく待ってくれた。耳や首筋をちろちろと舐め、時折クスクス笑いを流し込みながらだけれども。
「でき、まし……た……」
ようやく絞り出した一言はひ弱なんてものじゃなかった。姉さんのペニスが嬉しげに跳ねる。
「うん。教えて、何センチ？」
おれの背筋が粟立ったのも小さく首を振ったのも、当然わかっているだろう。肌で感じているはずなのに。
「教えなさい♡」
姉さんの声は舞い上がる。ふたなりペニスが押し当てられておれのアナルがひくついて。
「6、センチ……です……」
姉さんのにんまりとした舌なめずりが手に取るように頭に浮かんだ。
「あぁ、そっかそっかぁ♡　フェラの時、お漏らししちゃってたもんねぇ。そりゃまぁ、ちいちゃくなっちゃうよね～♡」
わざとらしく語尾を引き伸ばしながら姉さんはメジャーをひったくり、手早く伸ばして自分のペニス

にあてがった。ぐりぐり腰を押し付けておれの股間を蹂躙しながら。ひんひん悶える無様なおれを身体と竿とで堪能しながら。

「んーっと、はぁい。わたしはぁ……28センチ♡」

ひときわ高らかに勝ち誇る。火照った声が鼓膜を貫く。何度やっても同じこと。そんなのはなからわかっていたのに、測るまでもなかったのに。熱い雫がとろりとこぼれた。

姉さんのペニスが、ふたなりちんぽがバナナなら、おれのはちぢれたイモムシだった。余った皮で先端は隠れ、ズボンの中へのお漏らし射精ですっかり精魂尽き果てていた。姉さんの巨根に持ち上げられてただただちょこんと乗っているだけ。

「それじゃ、次ね。太さもちゃ～んと比べっこしなきゃ……ぐぅっ♡　ちょ、どーしたの……おぅっ♡」

白々しさしかない提案は下品な嬌声で遮られた。おれが両ももをぴったりと閉じ、にちゅにちゅと擦りつけて媚びたからだ。男の力で挟み込んでも姉さんのちんぽはびくともしない。心地良さげに脈打つだけ。涙が一筋頬を伝った。

「やっ、やだぁ、いやっ……」

食い縛っていた歯。噛み締めていたはずの顎。気付いた時にはだらけていた。幼児みたいなイヤイヤがおれの口から溢れていた。互い違いに太ももをすり合わせるたびローションがねちゃくちゃ音を立てる。潤滑液の出どころはすっかり盛った尻の奥。ふたなりペニスに触れ続け、モノ欲しげに口を開け始めたおれの穴の中だった。

「ください、姉さんの……本物おちんぽ……おねがぃ……っ！」

声がかすれる。視界が歪む。姉さんにへこつき縋るたび、折角仕込んできたローションがとろりとろりと漏れ落ちていく。どんなにやらしい女の子もこんなに濡らしはしないだろう。男だろうと女だろうとここまで卑しく媚びたりしない。涙声を上げるたび、色んなものが流れていく。涙に混じって溶け堕ちていく。

無造作に投げ捨てられたメジャーがカン、と乾いた音を立てた。小さく可憐な姉さんの指が、花びらのような手のひらがおれの頬を包み込む。顎をなぞって喉をさすって、声をひそめて姉さんは笑った。

「仕方ないなぁ、もう。このどすけべオナホめ……♡」

淫らな許しが優しく響く。ふたなりちんぽの先走り汁がおれの脛へと滴り落ちた。

にゅろんと淫らな水音を残し、竿が股から抜けていく。一瞬上がった鳴き声は枕の中へと吸い込まれた。柔らかくおれを受け止めてくれたのは姉さんの匂いが立ち上るベッド。突き飛ばされ、押し倒されたのだと気付いた時にはもう遅かった。汗と甘さとオス臭さ。全てが混じった濃ゆい香りがおれの胸を満たしていて。

「ふだしゃ、くだしゃいっ！　おねがい、おねが……っ」

くぐもった上に舌足らず。尻を突き上げ差し出して、ローションを垂らして縋り乞う。ハメて欲しくて乱れ狂う。吐き出す息のあまりの熱さに喉が焼け焦げそうになる。シーツを痛いほど握りしめ、枕に深々と顔を埋め、それでもおれは止まれなかった。盛ってしまったおれの身体は理性なんかじゃ止まれない。

「だめだよ、ダ～メ」

姉さんはきっぱり言い切った。内股になったももに、鳥肌の立った背中に、緩みきった肛門に怖気が走る。

「このままハメ倒したらさ？　ぷるんぷるんって揺れてるかわいいおちんちんちゃん、ベッドに擦れて痛いでしょ？　だ・か・ら……」

間延びした窘めと奇妙な物音。がさごそ何かが擦れる音とにちゅにちゅ粘っこい水音と。聞き覚えのあるそれに嗚咽が漏れる。睾丸が固く縮み上がった。

「ちゃ～んとおむつ、穿いてから♡」

開くまいと結んだ唇。姉さんが与えた感触は容易くそれをこじ開けて。

「ひひゃぁぁぁぁぁ～～っ！」

情けない悲鳴が喉を震わす。枕でくぐもったはずなのに、赤ん坊みたいな泣き声が寝室中に響き渡った。萎えきったペニス―姉さんいわく……おちんちんちゃん―を冷たい粘液がくるみこむ。おれの股間を襲ったのはローションをたっぷり塗り込んだ大人用の紙おむつ。慣れた手つきで穿かせながらも姉さんは言葉を緩めない。

「そんなにおちり突き出しちゃってぇ♡　おまんこ穴も合わせましょうねぇ。うわ、えっろぉ……♡」

あらかじめ入れてあった切れ込みは丁度尻の谷間に重なった。性器と睾丸、オスの器官はおむつの中。ごわごわの紙に押し込められてそれこそ赤ん坊と変わらない。違っているのはアナルだけ。姉さんの粘っこい視線を浴びながらトロめきひくつくオナホ穴だけ。ハメられるための格好。犯されるための惨め

な姿。頭に浮かぶ醜態におれは枕を抱きすくめた。いやいやと、駄々っ子のように首を振った。ローションが尻から零れるだけで何も変わりはしなかったけど。

「それじゃあ。おまんこオナホ、いただきまぁす♡」

生唾を飲み込む音がした。脇腹を鷲掴む華奢な両手。待って。と縋る間も無く、覚悟を固める隙も無く。雄々しい穂先が入り口を塞ぐ。瞼の裏に火花が散った。

「ひぐぅぅっ！　や、あひっ！　あつぅ、ねえしゃ……うぅぅっ！」

乱暴に貫く、なんてことはせず、姉さんが最初に選んだのは触れ合うだけの軽いキス。ベッドの上で膝立ちになり、ぷにぷにの亀頭を穴へと添えてその感触を愉しんだだけ。優しく静かな始まりにけれどもおれはいななき喘いだ。焦らされ弄られ追い込まれ、すっかり仕上がっていたおれの身体。今にも溶けそうな肛門よりも姉さんのモノはなお熱かったから。そして。

「あひぃっ！　なに、すごぉ……ぐぅっ♡」

姉さんの嬌声が耳を揺さぶる。ちゅぱちゅぱねちゃくちゃと淫らな音が背骨に響く。ほぐれきったおれの穴が、待ち侘びていた本物ちんぽに自ら吸い付き媚びしゃぶったからだ。オナホ穴のぐじゅぐじゅとしたうねりがおれ自身にすら感じ取れたからだ。鋭くなった感覚が何が起こっているのかを余さずおれに伝えてくる。ましてやハメている側の姉さんならば。

「ちょっとぉ、欲しがりすぎ……やんっ、でしょ♡　やらしぃ、このどヘンタイ……あぅんっ♡」

淫らにうねる窄まりを目でもモノでも味わえる。どんなにおれが欲しがりなのかが、姉さんちんぽに恋していたかが一目瞭然。下腹あたりが甘く引きつり荒れ狂う熱が勢いを増した。

「うぐぅ……っ、ねえしゃ、いわないれ、ねえひゃ……あひぃんっ！」

口が閉じられない。涎が垂れる。じわりじわりと伝わってくるふたなりペニスの滾りと固さ。耳を疑いたくなる惚け声がおれの喉から次々に湧く。腰が前後にカクカク揺れた。必死になって尻を揺すった。

「ちょっと、こらぁ……♡　だめっ、うごくのだーめっ！」

強めの制止に肩が跳ねる。うなじが汗ばむ。アナルが窄まり亀頭を食む。もじつく腰をぴたりと止め、おれは暴れる胸を膨らませた。でも、姉さんは荒い息を整えるばかり。亀頭とローション、オナホ穴。それらが奏でる下品な音がおれ達の間をしっぽり満たす。

「そうそう。じゃないとぉ、おまんこフェラ、愉しめないでしょ……♡」

沈黙を破った一言に危うく肺が裏返りかけた。入り口に感じた姉さんの目つきは獲物をなぶる猫のよ

う。煮え立つ頭に血が上る。おむつの中の貧弱ペニスが震え上がって泣きじゃくる。
「しょんにゃ、そんにゃぁ……っ」
発情した雌猫だってもうちょっとまともに鳴けるんじゃないか。涙を流して尻を捧げて、なりふり構わず交尾を乞うなんて。それも舐めるように見つめているだろう姉さんの目の前で。脳味噌がぐずぐずと溶けていく。
「ハメてほしかったらぁ……けつまんこ、あひんっ♡　しゃぶるの……オっ♡　止めなさいっ♡」
おれの脇腹を掴んだまま、雄々しいペニスをあてがったまま、姉さんはどっしりと動かない。オス臭い声を上げながらもふたなりちんぽは来てくれなくて。待ち焦がれている専用オナホを貫いたりはしてくれなくって。
「むりぃ、そんな、できな……あぎぃぃぃぃっ♡」
撃たれた。抉られた。一番奥まで殴られた。押し拡げられる感触とみちみち感じる圧迫と。押し寄せた刺激は津波みたいで上がった悲鳴は酔い惚けていて。遅れて感じた焼けるような熱。おれのナカから放たれていた凶悪ペニスの孕ませ熱気。
「あれぇ……ハメてほしかったんじゃ……なかったのぉ？」
途切れ途切れにでもねっとりと、姉さんの声は昂っていた。おむつ越しでも伝わってくる女の子らしい太ももの柔さ。ローションを仕込んでいてもなおはっきり感じる亀頭の張り出し。胸の空気を搾り切ってもまるで足りない。音にもならない嬌声を叫び悶えて耐えるしかなく。枕に縋りバスタオルをかき乱し、がたがたとおれは震えていて。
「痛くはない、よねぇ……♡　こんなにちゅぱちゅぱぬちにちぃ～って。おまんこ、媚びっ媚びだもん♡」
したたるような囁きに背筋がかっと燃え上がった。汗を滲ませ爪先を握り込み、みっともなく髪をかき乱し、それでもナカは窄まりかえる。姉さんがわざわざ聞かせた通り、ほぐれたまんこは媚びている。いきなり奥まで犯されたのにうっとり蕩けて吸い付いている。極太ちんぽに押し出され、ぶぼりとローションが零れ落ちた。
「それじゃ……オっ♡　いくよぉ……♡」
大きな飴を舐め上げるように、棒付きアイスでもしゃぶり尽くすように、ひくつく腸内を味わいながら姉さんはちんぽを抜いていく。不意打ちだった挿入とは真逆で引き抜く動きは亀のよう。括約筋をこ

すり抜ける血管、次第にめくられる腸壁。姉さんの腰遣いは優しくて、細やかな刺激も感じ取れた。でも。

「りゃめ、ねえひゃっ♡　まんこ、ほじりゅの……らえぇっ！　ぐぅぅっ♡」

抱かれるおれの口からは汚い喘ぎが迸る。肺が張り裂けそうなほど、声がきしむほど噴き上がってなお止まらない。聞くに堪えない自分の声が頭蓋に響いて脳髄を炙る。

痛くなんてなかった。辛くなんてなかった。でも、立派なカリは腸壁に食い込みおれをほじくり出そうとする。鉄のような肉棒が穴の中を掘り返し、姉さん好みに耕していく。吸い付くおれの内側が強いちんぽに抉られるたび、ぞわぞわとした快感が身体の中から広がった。正座を続けた後に来る居ても立っても居られない痺れ。あれを濃くして強くして、たっぷりの気持ちよさを足したような感覚。肌のざわめきが止まらない、手足の痙攣が増していく。燃え広がった悦びは全身を包んで覆いつくし、至る所にまとわりつく。発情汁が滴り落ちた。

「ひぎ……っ♡　ひん、ひ……っ♡　あひゃんっ……」

姉さんが腰を引ききって亀頭がじゅぽりと抜けたとき、おれはすっかりへたばっていた。ベッドに突いた膝だけでどうにか尻は支えたものの、それ以外の全てが緩みきっていた。たった一度の抽送だけでふたなりちんぽに吸い尽くされ、何もかもを捧げたようで。指一本すら動かない。だらしなく開いたメス穴も垂れ流されるトロ声も姉さんに晒したままなのに。

「やば、これやっばぁ……♡　なにぃ、このマンコ……やらしすぎ……いっ♡」

荒げた息。震えた声。おれの背中に垂れた汗。尻を掴んだ姉さんの手がおむつ越しでもわかるほどじっとり茹だっていたことに今更になって気が付いた。

「そーちゃん、ごろんして……♡　使わせて、オナホだもん♡　たくさん、たっくさん……ハメさせてぇ♡」

頭の中がまばゆく眩む。姉さん専用ハメ穴が蠢く。脱力しきった両腿は素直にベッドに崩れ落ち、おれはべたりとうつ伏せた。尻を掴み両足をまたぎ、姉さんがおれに覆いかぶさる。頼りない重みが抜け殻のような身体にのしかかる。口元がほころびへにゃついた。

二度目の挿入はなめらかだった。極太ペニスを受け入れたアナルは今まで以上にほぐれてとろけ、亀頭を頬張り飲み込んでいく。たおやかな太ももを下品に開いた姉さんは、じゅぷじゅぷと腰を進めながらおれの背中にその身を預ける。潤んだ肌を寄せてくれて、火照った頬をすりつけて。おれに両手を回

してくれた。高鳴る鼓動が伝わってきた。

今日の姉さんが選んだ体位は、発情しきった勃起ちんぽを根元まで埋め、淫乱穴にぐりぐりと腰を押し付ける種付け寝バック。尻に当たった睾丸は固く縮んでシワが寄り、作りに作った孕ませ汁の粘つき具合が手に取るよう。下腹の疼きが激しさを増し、胃袋の中まで熱気が這い登る。

「あぁぁ……♡　きもちぃ、ぬぷぬぷってぇ♡　けつまんこ、借りるねっ♡」

姉さんの舌はもつれて回らず、問いかけじみた宣言はどこか滑稽だった。膝を折り曲げおれにしがみつき、犯す気満々の下半身はまるで弱っていなかったけど。精処理アナルをずっぽりハメて固さを増した雄ちんぽはどくんびくんと意気込んでいたけど。

なけなしの力で歯を食いしばった。ナカを締めようと力を籠めた。けど、おれの頑張りは殆ど意味をなさなかった。荒々しい腰振りも奥を突き込まれる衝撃も、おれを襲ってはこなかった。

ぱちゅぱちゅ、ちゅこちゅこ。ちくちくねちねち。卑しくねちっこい水音と共に小さな刺激がアナルに走る。絡めた腕をそのままに押し付けた身体を離さずに、姉さんは小刻みに腰を振る。短く何度も執拗におれの穴を味わって。

「おぐぅっ！　くひぃんっ♡　おひっ、おしりオナホ、すきぃっ♡　きもちぃ、これきもちぃっ♡」

だらしない嬌声。犬のような息遣い。裏筋、カリ裏、亀頭、睾丸。ふたなりちんぽの性感帯をおれの身体に擦りつける。一番きもちいとこだけをひたすらねちこく刺激する。ねめつく腸壁に先っぽを、火照った尻に種汁袋を、自分勝手になすり込む。姉さんが気持ちよくなるための、射精するためだけの腰遣い。性欲処理に使われる穴。言葉通り、オナホール。心臓がひときわ跳ね上がり狂ったように暴れ始めた。

「オっ♡　いぃ、きもひぃ……っ♡　おぐぅんっ♡」

腰振り自体は激しくない。けど、姉さんの体重はまるごとおれにかかっていた。脇腹を挟む両膝も絡みついた両腕も押さえ込んで離さない。ベッドに寝そべりへたばるおれに逃げ出すことなど出来やしない。夢見心地でハメ腰に耽り、おれを貪る姉さんを振り払うなんてとんでもない。しどしどの声にうなじが痺れる。脳が沸き立ち崩れていく。まるで火にかけたバターのように溶けて泡立ち広がっていく。

爪が立ってしまう寸前までおれに食い込む姉さんの指。汗にまみれ振り乱され、おれをくすぐる姉さんの髪。震え始めた姉さんの分身。着くまでの間待っていられず、おれのYシャツを羽織りながらオナニーに溺れていたふたなりちんぽ。すぐさま押し倒せるように整えてあったこのベッド。射精がしたい、

種付けたいと叫ぶような襲いぶり。嗚咽が漏れる。頬がほつれる。目頭がツンと熱くなる。姉さんの枕を抱き締めた。汗とシャンプーの匂いがした。

「ひぐぅぅっ♡　なにぃ、まんこ締ま……うぅっ♡　えろ、えっちぃ、どすけべぇっ♡」

姉さんの声音(こわね)がまた上がる。かすれそうになる。睾丸の激しい痙攣。忙しない腰使い。心臓が破けそう。頭の中を光が飛び交う。オナホ穴から渦巻く熱は胸を押し上げ喉まで詰まらせ、瞳を通じてあふれだす。

「あぐぅっ♡　あひっ、いく、でちゃ……でる、いぐゥっ♡」

姉さんはおれを締め付けた。身体中で抱き締めた。無理やりに、こじ開けるようにびくつくちんぽをねじ込んだ。逃げられない。逃げたくなんかない。心臓が、オナホまんこがきゅんと縮んで。

「そーちゃん、そーひゃっ、だいしゅきぃぃっ♡♡♡」

飛び交う光が、荒れ狂う熱が、おれの中で弾けて散った。

「ぐぅぅぅぅ〜っ♡　いっ♡　オッ♡　じゅきぃ、おまんこぉ、かわいぃっ♡」

燃える、灼ける、融ける、蕩ける。腸内(ナカ)を襲う精液がおれの身体を焼き尽くす。流し込まれる姉さんの声がおれのココロを沸き立たす。

「えっちなこえすきぃ、ひぅぅっ！　おねだり、あひんっ♡　うれひ、かったぁ……あぐぅっ♡」

止まらない。注ぎ込まれて止まらない。次から次へと押し寄せる。おれのなかへと絶え間なく。

「ありがとぉ、きへくれてぇ……っ♡　ひぁん、まだでひゃ……うぅっ♡」

涎が垂れた。涙が伝った。種付け射精はまだ終わらない。ふたなりちんぽが荒れ狂う。姉さんの声はとめどない。おれを優しく包み込む。

「おむつかわいぃ、ちんちんかわいいっ♡　ひぎっ、あひんっ、しゅご、いぃ……♡」

ごぼごぼと腹の底から音がした。へそのあたりが仄かに重たい。粘つく汁に犯されて火傷しそうな専用オナホは、甘く愛でられ食べてもらって悦び悶えひくついた。

「あ、やぁん……っ♡　きゅんきゅんしへぇ、やらひすぎぃ、おぅっ！　くぅぅ……」

だんだんと震えが緩くなる。姉さんの形にしてもらった穴はちんぽの動きが手に取るよう。強く激しい絶頂が重なるたびに少しずつ薄れ、股間の脈動が和らいでいく。七度、八度と精子を噴き出しそれでも固さを保ったけれど。どろつく遺伝子が腸内を犯し、孕ませようと泳ぎ回ったけれど。激しくっても強くても、どんなものにも終わりはあった。

「ふへぇ……そーちゃん、だぁいすきぃ……♡」

数え切れないほど震えた果てに、いつしかくったりと落ち着いていって。しな垂れかかった姉さんがおれの背中をついばんだ。とろけそうな頬ずりが、肌をなぞった指先が、おれの何かをぷつりと切った。

「ぁ、ぁぁぁ……ねえ、ひゃっ、め、だめぇ……」

必死に絞ったなけなしの声は自分のものとは思えない。あまりにか弱い縋り声は何の役にも立ちやしない。気怠く呆けたおれの腰から最後の力がかき消えていく。おむつの中に熱が広がる。ぬるい感触。生暖かい湿り気。股間がふわふわほどけて緩む。小さなモノがひくついた。

「ぁ、そーちゃん……」

漂う臭いが鼻をつく。ちょろちょろと溢れてしまったものがおれの股ぐらを満たしていく。姉さんのベッドの上なのに。姉さんに襲ってもらえているのに。本来の役目を果たしたおむつが水気を吸って膨らんでいく。喉元が凍てつく。言葉が出ない。おれの口から零れたものは引き絞るような嗚咽だけ。でも。

「へへ、かわいいね。そーちゃんかわいい、いいこいいこ……そのままぜぇんぶ、ちっちだよ……♡」

姉さんはおれから離れなかった。離れないでいてくれた。身をよじろうともしなかった。火照った指でおれを撫で、恋人のように手を繋いでくれた。囁き声は温かい。触れ合う肌はやわらかい。

おれがぎこちなく握り返すと、姉さんは指を絡めてくれた。脈が伝わる。重みが染み入る。姉さんの吐息が聞こえてくる。ぬかるむおむつもそのままに、おれはただただ姉さんを感じた。ココロもカラダも蕩けていった。

「そーちゃん、ごめんね」

口元を拭ってくれながら姉さんはおずおずと切り出した。濡れた唇は艶っぽく、悲しげにしゅんと下がった眉がなんだかとても綺麗に見えた。

「その、折角そーちゃんが付き合ってくれたのにさ。言い出しっぺのわたしが……なんていうか……」

ベッドの上であひる座りし、もじもじと肩を落とす姉さん。いじらしい姿は身勝手な種付け交尾とまるで結びつかない。ましてや、今朝唐突に送ってきた『今日はオナホプレイね、えっぐいのするから♡』なんて無茶苦茶なメールはとても想像出来なかった。

「今更でしょ。優しかったじゃん。今は勿論……途中も」

壁に背中を預けきり、おれはじっと姉さんを見やる。思い浮かんだ気遣いのうちどれを言おうと考えたけど姉さんはぴしりと固まって。

「べ、べつに？　そんなことない……んじゃない？　かな？」

まさしく言葉通り、目が泳ぐとはきっとああいうことなんだろう。ついつい頬がほころんだ。でも。セックスの最中だけじゃない。おれが落ち着くまでずっと一緒にいてくれたのも、動けそうにないおれを起こし、こうして壁にもたせかけてくれたのも。口移しで水を飲ませてくれたのも。……おれが粗相をしたものを嫌な顔一つせず片付けてくれたのも。全部全部、姉さんだった。

「ありがとう……姉さん」

伝えるべきこと。伝えたいこと。口にしたいと思ったこと。でも、まるで封を切ったカイロみたいにみるみる頭が熱くなる。しかも姉さんは弾かれたように顔を上げ、目を見開いておれを見つめた。思わず片手で口元を隠す。人のことが言えないじゃないか。

「え、や……そんな、わたしこそ……っ！」

きらめく瞳と染まった頬。乙女そのものな可愛らしい表情は、けれどもすぐさま引っ込んでしまった。

「あの、これはちがうの、その、えっと……」

おれの何に反応したのか、股間がむくむくと頭をもたげ始めたからだ。首を振っても身を丸めても、姉さんのモノは雄弁だった。人並み外れたふたなり巨根がおれを目指して勃ち上がる。再びむわりと臭いを放つ。胸の高鳴る音がした。骨の髄まで響き渡った。

「……姉さん」

重たい身体を引きずって、鈍い手足をのろのろ伸ばして姉さんのそばへ。蜜に惹かれる羽虫のように誘ってくれるところまで。

「いや、だって、さすがにさ！　わたしだって……だいじょうぶ、へーきだから……だめぇ……」

隠そうと閉じる太もも、おれを気遣ってくれる華奢な腕。儚い花に触れるようにそっとそれらを押し分けて、奥にそびえるおしべにおれは。

「ひゃぁぁんっ♡　そーちゃ、そんな、あうぅっ♡」

精一杯の優しさを籠めて今日初めてのキスをした。乾き始めた精子の味。苦くてしょっぱくほんのり甘い。鼻に染みつく青臭さ、唇越しに感じる炎。冷めて固まり始めた脳がすぐさまどろりと蕩けだす。

「ねぇさん、ねえしゃっ♡　しゃせてぇ……♡」

上目遣いに見上げた先には瞳が潤んだ姉さんの顔。孕ませ欲にわななきながらも待って、そんなと諌めてくれて。だから止まれるはずがなく。

「まじゅ、ひゃんと……ひれいにしゅる、から……ねえひゃん……」

べろりと舐め上げ啜り上げ、そのまま亀頭をしゃぶりこむ。頬張った先っぽは張り詰めていた。即尺奉仕をした時と勃起具合が変わらない。二回も射精をしたはずなのに欲情ぶりが薄れない。おれの身体で、おれの口で、こんなに大きくしてくれる。まだまだシたいと震えてくれる。いつまでも浸っていたかった気怠さは気付けばどこかに消えていた。

アナルが物欲しげに口を開け、折角もらった精液がじわりじわりと垂れ落ちていく。糊のような精子が広がりおれの股をべとつかせる。でも。

「そーちゃん……ありがと、ありがとぉっ♡」

漏れ出したって構わない。今日は多分、何回も。何度も何度も何度でも愛してもらえるだろうから。口中を埋め尽くし、みるみる熱くなっていく絶倫ちんぽに。涙目で笑う姉さんに、たっぷりハメてもらえるんだから。

# 姉の穴

『そーちゃん、買い物を手伝ってほしいの。大丈夫？』

今までも、姉さんはたまにこういうメールを送ってくることがあった。その時によって米が切れそうだったり洗剤を買い込みたかったり。服を選ぶのに付き合ってほしい、なんてむず痒くなるような頼み事もあれば、延々と増え続けるエロ漫画のせいで本棚が足りなくなった、とかいうこともあった。

ともあれ、おれは深く考えずに『土曜でいい？』と返事してしまった。後の祭りとしか言いようがないけど、何を買いに行くのかはちゃんと確認するべきだった。せめて『どこに行くの？』と一言聞いておけば。それさえしておいたなら。

「姉さん、あの、なんて？　え……え？」

「えー、恥ずかしいじゃん。何度も言わせないでよ」

意地悪ぅ。なんて呟きながらも見上げる瞳はきらきらと明るい。恋人みたいに腕を組みおれを捕まえ離そうとしない。姉さんがそっと背伸びをすると、くるぶし近くまであるスカートの裾が慎ましやかに揺れ動いた。

控えめながら化粧は綺麗で、お洒落な皮のバッグと落ち着いたフレアスカートにショールが華やかさを添えている。丁寧に身支度を整えた女性が男と腕組み、耳打ちしようと背を伸ばす。それだけを見ればデートだとしか思えないだろう。ただし、固まるおれの目の前にあるのはどこにでもあるコンビニエンスストアだ。洗練されたアパレルショップでも安さ自慢のスーパーでもない。安いけど重たい１０キロ入りの米や旬に出回る美味しい野菜、もしくはおれの感想を聞きながら選びたがる余所行きの洋服。そういったものはここには無くて。

「切らしてるんだぁ。コンドーム」

そう繰り返す姉さんにおれの背筋はぞくぞくとざわめく。どうにか絞り出した躊躇の言葉は自動ドアの開閉音にかき消された。届いたところで意味はなかっただろうけど。

有無を言わさぬ姉さんに引っ張り込まれ、成すすべもなく店内へ。もつれた足をどうにか立て直したところで店員さんの挨拶に肩が跳ね上がる。はきはきとした愛らしい声。どこからどう聞いても若い女の人のものだった。

冷たい汗が背中に滲む。姉さんの足取りはスタスタと迷いない。聞き間違いであってくれ。やりすぎ

な冗談であってくれ。そう祈りながらまばたきをしたけど、一直線に向かう先は生理用品の棚だった。腕組みを解いた姉さんは、タンポンやナプキンには目もくれずまっすぐ棚に手を伸ばす。

「はい。買って、持ってきて。ね？」

笑顔と共に差し出されたのはXLサイズのコンドーム。こんなものを入荷したのは一体どこのどいつなんだ。よりにもよって姉さんのマンションから徒歩二分、最寄りも最寄りのコンビニになんでこれが置いてある。普通はもっと、こう、あるとしても平均的なサイズじゃないのか。なんて頭の中でごねたところでどうにもならないのはわかっている。現実逃避くらい許してほしい。

「手伝ってくれるんでしょ？」

「……うん」

か細くか弱い肯定がひとりでに口から零れ落ちる。おずおずと箱を受け取った両手は明らかに赤みを帯びていた。嫌でも目に飛び込んでくる〈０．００５ミリ、極上の極楽〉という強烈な謳い文句。何の変哲もないコンビニの床が急に沈み込んだような気がした。

商品を選ぶ。レジに並ぶ。会計をすませる。一連の流れは順調に進んだ。昼にはまだ早い時間だったから店内にはあまりお客さんもいない。そして店員さんも少ない。というか一人しか見当たらない。

「……こちら一点ですね。レジ袋はご利用になられますか？」

「大丈夫……いらない、です」

流石はプロだ。震えながら俯いて、こんな買い物をしていく奇妙な客にも動じない。一瞬変な間があったような気がするけどそれは絶対に気のせいだ。何が何でも気のせいなんだ。

「ありがとうございました……」

歯切れのよかった店員さんの口調が一気によどむ。おれがコンドームを受け取り、ポケットに仕舞う素振りすら見せずに両手で持った途端のことだった。言われた通りに持っていく。ゴムのサイズも謳い文句も周りの人にさらけだしながら。当然、目の前の店員さんにも丸見えだ。今なら頭から湯気が出せるかもしれない。

「えらいえらい、ありがと。行こっか」

レジカウンターの横で待ち構えていた姉さんは満足気な笑みを浮かべていた。踊るような足取りでおれの腕に絡みつき、ぴたりと寄り添いしな垂れかかる。入店時には明朗だった店員さんの挨拶は、コンビニを出るときにはついぞ聞こえてこなかった。

姉さんのヒールの音がコツコツと響く。その数倍の速さでおれの心臓が荒れ狂う。喉が乾いて張り詰める。道行く誰かとすれ違うたび、視線がちらちらと手元に刺さる。マンションまでの僅かな時間がマラソンよりも果てしない。

「見た？　店員さんの顔」

ひときわ強く腕を抱き寄せ、姉さんは小声で囁いた。優しげな声色がおれに染み入る。イジワルな言葉が耳をついばむ。

「今からヤることばれちゃったねぇ。ちらちら見てたよ？　そーちゃんのこと」

わざわざ見えるように持ったゴム。自分でもわかるほど火照った頬。ひけらかすように腕を組み隣に侍った可愛らしい姉さん。ここまで揃えば誰だって想像がつくだろう。でも。

「そーちゃんは……ハメられる側なのにね♡」

足元の感覚が消えていく。目の前が水飴のようにねじくれていく。鼠径部が、腰の根元が、パンツの中で震える性器が、ふつふつと煮えてとろけていった。

「うぅ、う……っ」

極薄ゴムの滑らかさと仄かに感じるローションの潤い。コンドーム特有の感触が粘っこくおれを擦り上げた。皮越しに裏筋をねぶり、震える竿をつつき回し、涙を浮かべたおれの亀頭をぺちりぺちりと優しく叩く。

「んふぅ。やっぱりカワイイね、おちんちんちゃん♡」

鼻にかかった息を漏らすと姉さんは舐めるように視線を這わせた。下着まで剥かれてベッドに連れ込まれ、仰向けに寝かされたおれの身体。頭上で固く縛られた両腕。みっともなく染まっているだろうおれの顔。無理矢理M字にこじ開けられた両脚。姉さんのペニスにつつき回され下敷きにされ、弱々しく悶えるおれの股間。それらを目でもカラダでも味わいながら上気した頬を緩ませている。

一糸纏わぬ姉さんが自慢げにそそり勃たせているのは30センチに届きそうなごつごつと雄々しい男性器。どうにかゴムを付けたものの、亀頭とカリとに押し拡げられて緑色の膜は張り詰めている。XLでも長さが足りず根元側の四割くらいは剥き出しだった。両性具有……ふたなりと言えど、ここまで凶悪な人は他にいないんじゃないだろうか。

一方、されるがままに押し倒されたおれとその股ぐらで悶える弱っちい性器ときたら、ひたすらに惨

めとしか言えなかった。長さは姉さんの三分の一以下、太さは半分もないだろう。典型的な包茎の上、誇らしげに押し当てられるふたなり竿に潰されながら鈴口を濡らしている始末。しかも、しかもだ。

「もぉ、必死にぴゅくぴく媚びちゃって……♡　良い子ちゃんでちゅね～」

甘ったるい赤ちゃん言葉に思わず固く目を閉じる。顔を覆うこともできやしない。

脱がされ縛られ組み伏せられて、身動きさえも取れないままに性器の優劣をつきつけられる。どちらが上かを教え込まれる。そんな状況で……おれのそこは精一杯に勃起していた。そうなってなお粗末なのに、粗末だからこそ、先走りが溢れて止まらない。

「ちが、いわないで……姉さん」

「そんなめろめろ顔で言われてもな～♡」

ちがう、ちがうのと縋りつくはずが汚い悲鳴に押し流される。悪寒のような電撃が消化器官を遡る。くぷくぷと粘着質な水音が響く。静かに優しく力強く、姉さんの指が入り込む。入り口をほじくり押し開く。

「やぁ、やんっ！　まっへ、まっれぇ……くぅぅんっ」

たどたどしい懇願は姉さんを舞い上がらせるだけだった。湿った息が一段と荒ぶり指に力が籠められる。おれの太ももを左手で抑えて右手でやらしくこね回す。したたる腸液をすくい取り、丁寧にアナルに馴染ませる。細く滑らかな指先はあっという間に窄まりをほぐし、パクパクと口を開かせてくれた。襲われたときから、脱がされたときから、あるいはもっとその前から、熱気を孕んでいた卑しい割れ目。どうしようもなく淫らな穴は理性も羞恥も置き去りにして必死に愛撫に口付けを返す。おれを無視して吸い焦がれる。

「だーめ、却下。待てません♡」

涙目で悶えるおれを見下ろし、姉さんは晴れやかな笑みを浮かべて。

「いぎぃぃぃぃっ！　あひっ、やぁぁっ！」

堂々とした特大ペニスを一気におれへねじ込んだ。煮溶けたはずの尻穴が目一杯にはち切れる。教え込まれた交尾の味に内ももがガクガク震えだす。

「あぎっ、ひぁ、あぁっ、やぁぁ……」

目が眩む。汗が噴き出す。昂ったモノは熱くて太い。ナカから腹が炙られる。今まで数え切れないほど貰った感触。だけど今は首を振らずにいられなかった。口元を歪めずにはいられなかった。

「なぁに？　その、ちんぽイヤ？」
一息、二息間を置いてから姉さんはおれに問いかける。ぎらつくペニスと反対に言葉は静けさを帯びていた。弾かれたようにまた首を振る。今度はもっと、もっと強く。
「なん、でぇ……ゴムなんか……家なのにぃ」
気のせいのはず、変わるわけない。頭ではわかる、でもなにか足りない。かき乱されて掴めないまま息も絶え絶えに吐き出すと、姉さんは微かに両目を見開いた。濃い紅茶色の瞳が揺れる。小さく開いた口元がおもむろに切れ目を広げていって。
「オナホってさ、ゴム付けて使ったりもするんだよ？　そういう気分の時はね」
姉さんの声に甘みが混じる。眉をとろんと垂れさせて、子犬か何かにするようにおれの腿を撫で上げた。
手のひらの感触が心地いい。注がれる視線がくすぐったい。肉の棒が固さを増す。へその奥底、身体の芯が熱に浮かされ形を変える。柔らかな内側がきゅう、きゅうんと蠢いた。姉さんが舌で唇を湿らす。炎が肌に燃え広がって。
「ドスケベ、そーちゃんのド変態♡」
すっかり煮えた脳味噌を酔い交じりの言葉が突き抜ける。姉さんの姿がぼやけて揺れる。手首の縄がほどけるはずない。身体だって動かせない。だからそれしか無いっていうのに。
「ダメ。目、瞑っちゃダ～メ」
柔らかい命令だけだったら拒めたのかもしれない。穴を突き込む極太ちんぽと骨盤に響く衝撃があれば耐えられるはずがないけれど。のけ反らされてこじ開けられて、みっともない痙攣に丸ごと飲まれる。身体も頭もどろぐちゃなのに、姉さんが喉を鳴らす音だけはやたらとくっきり聞こえてきた。
「おっ、ひぎぃんっ、あびぃ……ぐひぃっ！」
突き込んで引き戻す。押し込んではめくり上げる。どちゅり、ぬちゅりと鳴り響く。ナカから伝わるゴムハメの刺激が身体中に染み渡る。波打ち広がる振動はおれの口から漏れ零れ、姉さんの耳へと帰っていく。
「くふぅっ、今日もほんと、濡れ濡れだねぇ。そんなに……あひっ、デート……うれしかったの……♡」
煽り文句と裏腹に姉さんの腰使いは優しかった。振り子のように穏やかに速度を保ってぐちゅり、ぬ

ちり。奥底までは押し込まずおれのうねりを噛み締める。そんなまだまだ序の口の控えめなピストンは、かえって立派なカリを深く腸壁に食い込ませた。前後するたびおれのペニスの裏側を、オスの一番弱いところを舐めるようにえぐっていく。引っ掻き出された痺れと熱が穴の奥からじわじわ根を張る。おれの血肉を犯していく。むず痒いような気持ちよさが肌の裏へとまとわりつく。震えが止まらず耐えられずいや、いやぁとぐずるばっかり。幼児の駄々みたいな有様に余計に頬が熱くなる。

「あーあ、情けなぁい……子猫ちゃんみたいだね？」

もしも両手が動いたなら、すぐさま顔を覆っただろう。ハメてもらっていなかったら焦らさないでと泣き出したかもしれない。でも、腹が苦しくなるくらい姉さんはおれのナカにいる。ずりゅずりゅと緩やかなピストンでおれを使ってくれている。沸騰ちんぽとトロ火のゴムハメ。隠せない痴態と姉さんの視線。後にも先にも行けなくて。

「ひぁ、そんな、ちがぅ……」

漏らした否定は湿っぽい。辛うじて舌を動かすたびに自分の熱気が頭を溶かす。そんなおれをにまにまと眺め、姉さんはちらと目線を走らせた。

「んくぅんっ♡　女の子っぽくは、ないけどね、ぐぅっ！」

膝が跳ねた。肩が強張った。ぎりりと爪が手のひらに食い込む。姉さんが見やった先、無防備に開け広げられたおれの両腋。最近処理を怠っていたそこからはひょろひょろの縮れ毛が伸び始めていて。

「ぁ、あぁ、ごめんなさ、ひぎぃぃっ！」

ごめんなさいをかき消したのは腰椎で弾けた静電気。カリ首で擦られていた感じやすいそら豆にそっと優しく先っぽが触れる。それだけで目の前が真っ白に染まり、ちかちかと明滅を繰り返す。

「でもまぁ、乳首はカワイイね。ふぅぅ、釣り合い取れてるんじゃない……♡」

前立腺。開発されてしまえば最後、そこを意識させられるだけで腰が砕ける快楽の源泉。知り尽くした弱点を姉さんは乱暴に突いたりはしない。雄々しい亀頭を静かにそこにあてがうだけ。それだけで淫乱オナホは悶え狂って泣き咽ぶんだから。勃起乳首をなじられたことが些細な悪戯になるくらい、おれが喘ぐと知っているから。今にも心臓が破れそうだった。

「やらぁ、あぁぁ……やめぇ、らえぇっ！」

ろくに見えない。聞こえない。じゅるじゅる淫靡な水音と、少しずつめくられていく腸壁と。きちんと頭に伝わってくるのは引き抜かれていく感触だけ。歯の根が合わない。涙が熱い。姉さんの亀頭が膨

れた気がした。
「あぎぃぃぃっ！　あ、あぁ……おぐぅっ！」
どちゅ、と突かれる。真っ直ぐ抜かれる。またハメられる。すぐさま引いていく。少し早くなったけど、それでも抑え気味の腰遣いだった。違いといえばいくらか角度がついたこと、当たる場所がズレたことくらい。強くて立派な姉さんちんぽが敏感な窪みをついばんでくるだけ。なのに血肉が妖しくざわめく。身体が勝手に跳ね上がる。よすがを求めて伸ばした指は空しく宙を彷徨った。
「ぁあ、やぁっ、ねえひゃっ！　やらぁっ」
ぱちゅぱちゅと肌がぶつかる。先端がおれをノックする。メトロノームみたいに一定の速度。規則正しく丁寧な、制御されたハメ腰ピストン。気遣いながら犯してくれる素敵で甘くて上手なセックス。なのにおれの喉はガラガラに焦げた。悲鳴がかすれて惨めさを増す。籠った痺れが肌から溢れ、身体の中からチリチリ焼かれる。
「あれぇ？　ちんちん、どーしたのぉ？」
不意に姉さんが笑いを零した。濡れた音を伴ってしなやかな指先が余り皮を摘まむ。何気ないその感触が今のおれにはフェラチオと同じ。昂る言葉が包丁も同然。鳥肌が手足を駆け上る。
「すっかりへにゃへにゃ、ちっちゃいねぇ。どーしちゃったのさ、これ♡」
視界が歪んで眩んでいても、その光景は頭に浮かんだ。身体がおれに教えてくれた。立派なペニスを突き入れられ、巧みな腰振りでアナルを使われ、好き放題に泣かされる。そのすぐ傍で放置された哀れなおれの分身はすっかり固さを失ってピストンのたびに揺れていた。簡単に皮を摘まみ上げられるほどに、萎え果てた姿を晒していたんだ。嬉しげにおれをからかいながら姉さんの欲は止まらない。小気味よく腰を打ち付け、汗を香らせしたたらせ、オナホの締まりを堪能している。粘っこい音は嫌いじゃなかった。なのに頭にガンガン響く。姉さんの言葉が胃袋で暴れて内側から喉へと突き刺さる。丁寧に執拗に裏筋がナカを前後するたび、薄皮が一枚、また一枚と削ぎ落されていくようで。
「やぁ、いやぁ……やらぁっ、ひんっ！　ひぐぅ、あぁ……」
だらしのない縋り声にぐずぐずと水気が混じり込む。鼻にツンとした痛みを覚えた。どうしてだろう、辛くないのに。ちゃんとほぐしてもらえたのに、優しく挿れてくれたのに。イイところをしっかり狙ってくれて、ハメ方も優しくしてくれて。痛いことなんてなんにも……。
「そーちゃん、わたし、その……やりすぎた？」

その声はひっそりとしていて、囁きくらいの小ささだった。軽く鼻を啜り上げただけで散り散りにかき消えてしまいそうなもやを思わせる頼りなさ。それがおれに届いたのは静かになっていたからだ。絶え間なく響いて鼓膜を揺さぶり、部屋中に満ちわたっていた肉が打ち合う淫らな音。それがぴたりと止んでいたからだった。

まばたきを繰り返すにつれて目の前が段々と戻ってくる。姉さんはおれに手を添えて、ナカにペニスを埋めたままでこちらを真っ直ぐ見つめていた。リンゴのように頬を赤らめ、けれども顔つきはしんと静か。苦しいくらいだった下腹は少しだけ楽になっている。変わらずハメられたままなのに。腿と脇腹に感じる姉さんの手にはじんわりと力が籠っていた。激しい火柱が姿を変える。喉元の棘が崩れていく。

「ごめん……」

視線が交わり絡み合う。二人っきりのこの場所で。内側から萎れていく姉さんにおれができるのは、ただ伝えることだけだった。だから、せめて丁寧に。きちんと届けられるように。違った火照りを覚えながら胸の底を探ったけれど。

「ううん……すき」

呆れるほど単純。いっそ馬鹿げた色気のなさ。穏やかにはぜるともし火からはそんなものしか見つからない。だからだろうか、姉さんの瞳は動かなかった。身体も微動だにしなかった。ただ、手のひらの圧が増した気がした。

「ごめん、おれこそ。姉さんとするの……すき」

ドクドクと脈を感じる。暴れ狂っているわけじゃない、巡り温め高まっていく。姉さんの姿が霞んでいく。一言ごとに口元がほどける。多分だけど、姉さんも。

「して、おねがい、もっとぉ……♡」

真っ赤に染まっているのがわかる。瞳が潤んでいるのもわかる。アナルがきゅんと窄まって甘えながら縋りつく。姉さんがおれの腿を握った。薄い肩を震わせた。

「ありがと……♡」

シーツが擦れて音を立てる。そろそろと姉さんが身体を倒し、おれに体重をかけてきたからだった。股を開いて身体をずらして近寄る姉さんを受け止める。大きなモノを咥えこむ。汗を含んできらめく茶髪が、雫を帯びた綺麗な睫毛が、おれを見つめる二つの瞳がゆっくりと迫ってきてくれる。

「いたくない？　そーちゃん」

そっと右手をつきながら姉さんは遠慮がちに囁きかけた。身を傾けた程度だからベッドの隣に立っていた時とそこまで距離は変わらない。なのに言葉が深くまで響く。姉さんのささやかな胸元から汗交じりの熱気が伝わってくる。

「うん、姉さん」

考える前に頷いていた。人前で腕を組んでもらって、一緒に歩いて話をして。ハメられるんだと教え込まれて固い勃起を振りかざされて。手早くそれでも丁寧に蕩かしほぐしてもらったそこは何も問題なかったから。奥の奥までハメてもらっても悦びよがって吸い付いて、ちっとも痛くはなかったから。

「へーき、大丈夫だから……ぁ、ねえさっ」

言葉尻がもつれた理由は痛みでも悦びでもない。姉さんの指が寄り添ったからだ。晒されたままの醜い腋に。汚らしく縮れた見苦しい毛に。ろくに動かせない肩が不格好に震えた。

「だいじょーぶ、ごめんね」

青ざめるおれに姉さんは笑いかけた。ペニスは固いし吐息は熱いし、高まりきった心音がおれの耳まではっきり届く。なのに笑顔がどこか切ない。胸の真ん中がちくちくと疼いた。

「近くで見たら、うん。なんだかえっち。かわいいよ」

縮れ毛の先をそっと撫でる。毛元に指先を潜らせる。汗ばんだ窪みを丹念に拭う。姉さんの仕草は子供の相手をするようで、恋人に触れるみたいでもあって。

「生えかけで……子供みたい♡」

強張りが緩んでほつれた途端、可愛らしい声色が隙間を射貫く。頭に上る血が感じ取れた。ぬるくとろける温かさ。逃げ出したくない底無し沼。

「はずかしい？」

問いかけられる。瞳が向き合う。覗き込まれる。頬が痺れる。姉さんの唇が濡れている。優しい言葉。傾げた小首。柔いところに食い込む甘噛み。心に歯型を残されて、澄み渡った気遣いに背中を押されて、おれは気付けば口を開いていて。

「うん……でも」

だらけた足を姉さんに回した。ほっそりとした腰に絡みつく。震える踵とお尻が触れ合う。腕も動かせたらよかったな、なんて思った。

「……すき」

潤んだ言葉と上気した視線がおれの身体に降り注ぐ。するすると沁み入り広がっていく。指の先から骨の髄まで余すところなく駆け巡る。あんまりに行き渡るものだから、なんだかふわふわと舞い上がっていきそうな気がした。

「おれも、すき」

秒針が時を刻む。立ち込める蒸れた匂い。身体を汗が伝っていく。おれたちの間に漂う熱気。姉さんがシーツを握り込む。おれの足が姉さんにすりつく。仰向けのまま腰を上げるやや無理のある体勢も、縛られ擦れてしまった手首も、これっぽっちも気にならなかった。

おれが締め付け媚び誘ったのか、姉さんがむらつき堪らなくなったのか。どっちが先かはわからない。一緒なのかもしれないし、身体が勝手に、というやつかもしれない。ねっとり甘くて濃ゆい時間は、きっかけを思い出せないくらい自然に淫らな交尾を孕んでいた。姉さんとおれの二人っきりは卑しい鳴き声で彩られていた。

「ひっ、あひゃん♡　ねえしゃ、くぅぅんっ！　おぐぅっ♡」

ぐちゅ、どち、ばちゅんと肉が鳴る。おれの愛液と姉さんの先走りとが絡み合って漏れ広がる。少しだけ激しくなったピストンはきっと体位のせいだけじゃない。練りほぐされた腸壁が立派な竿にむしゃぶりつく。

「ひぎぃっ、あひゃ、らぇ、それらぇぇ……っ♡」

勢いよく入り口近くまで引き抜かれ、ウサギみたいに身体が跳ねる。ぎしぎしと背骨が音を立てる。へそを裏側からほじくられるような危うい妖しさに狂わされ、だらしなく緩んだ舌を取り繕うこともできやしない。不協和音が増していく。おれたちの間を繋げてくれる。

「あくぅぅっ♡　ヤバ、これぇ……！　そーちゃ、そーちゃんっ」

姉さんの声がうわずった。一突き一突きがおれの弱点を突き、逸れ、かすめ、えぐる。一定の調子を保ちながらも少しだけ不揃いになった腰遣い。悦ばせようとしてくれながら、軋み始めた姉さんのセックス。目頭が重たく熱くなる。

「ほひいの、ねえしゃんっ♡　きもちよく、あぎぃっ！　なっへぇ……♡」

焦点も定まらない目で姉さんを仰ぐ。感触もおぼつかない足でしがみつく。自分のねだりがぼんやりと聞こえた。あんまりに恥ずかしい欲しがりがおれのナカを昂らせ、燃やして濡らして絡みつかせて。

「そーちゃ、しょんな、あぁ、ひぅっ！　だめぇっ♡」

潤んだ瞳。緩んだ口元。涎すら混じったぐちゃぐちゃの笑み。崩れた化粧もだらしない声もおれの胸を締め付けた。固いちんぽがぐつぐつと滾る。がくん、ぞくんと痙攣が伝わる。きっと姉さんと同じくらい、おれの笑みもだらしなくって。

「いぎぃっ！　いぐぅっっ♡」

振り絞った叫びと大きな脈動。頭の中が塗り潰される。ほんの一瞬間を置いて。

「ぐぅぅぅ〜〜〜〜っ♡　ひぎぃっ！　あひゃ、あっ、おほぉぉっ♡」

どぷんとナカが膨れ上がった。なだれ込む。爆ぜて轟く。熱く重たい塊が発情穴を埋め尽くす。欲しがるアナルへ襲い来る。

「おぐうっ、うぅっ♡　そーひゃ、んくぅっ！　あ、あぁぁ……っ」

眩んだ頭にトロ声が鳴り渡る。灼けた身体を射精が満たす。姉さんの指が肌に食い込む。脳味噌がぱちぱちと弾けて泡立つ。声を上げることも出来ず、おれはただただ姉さんを感じた。溺れそうで溢れそうで、はち切れそうで耐えられなくて、いつまでも続いて欲しい気もした。

汗が滴り落ちる。ぜいぜいと喉が鳴った。せきこみ息をするたびに、ピントがぼけていた意識に明確な輪郭が戻ってくる。肩で息をする姉さん、ほんのり柔らかくなったふたなりペニス。そして腹に感じるどろつく重み。薄いゴム越しに種付けてもらったとろろのように粘つく精液。

「へへ、えへへ……ありがと、そーちゃん。しあわせぇ……♡」

まるでナカに気を取られたおれを引き戻すみたいに、姉さんは蕩けた声を掛けてきた。勿論、緩みきった顔を見るまでもなく、裏表の仕込みようもない言葉だけでそんなの考え過ぎだとわかる。でも、おれは上手く返事ができなかった。もごもごと声にならない音を発するのが精一杯。

「いーよ、だいじょーぶ。……片付けちゃうね」

呼吸を整えながら姉さんはゆるゆると身体を起こす。ゴムハメしたまま放っておくと、精液に耐えかねてゴムが破けたり、逆流して床に垂れ落ちたりとろくなことがない。動けないおれに代わって後始末をしてくれる姉さんに待ってだなんて言えるはずがなかった。まして嫌だ、なんて。

「ん……しょっ、くぅんっ♡」

「ひぐぅっ♡」

ずるずるとした音が内側から響く。腸壁をめくり返される妖しい快感に背筋が逆立つ。亀頭とゴムを引き抜く時のひときわ大きな抵抗感が濁った悲鳴をかき鳴らす。入り口に引っかかったカリ首も重たく

なった精液溜まりも優しくおれを舐め上げてくれた。空っぽになったおれのナカがぬぽ、にゅぽと寂しげにうねる。

「うわ、うっわぁ……あは、はは……わたし、こんなに……」

気恥ずかしさの混じった苦笑いに思わず目をやる。ぽかんと間抜けに口が開く。考えてみれば当たり前、けれども改めて目にしてみると言葉を失うしかなかった。

姉さんが気まずそうに持ち上げ見つめているのは、明らかに伸びているうえ下側がどっぷりと膨れ上がった特大コンドームの成れの果て。白く濁った種汁はマグカップをなみなみと満たしてもなお余りそうな量がある。アナルが切なく窄まるわけだ。

重さに手間取りながらコンドームの口を結ぼうとする姉さんを、おれは黙りこくって見つめていた。だぶん、どろんと精液ゴムが揺れるたびに中身の濃さが頭に浮かぶ。あんな量を吐き出しながら、ふたなりペニスは芯を残してぶらついている。華奢なウエストと愛らしいヒップ、それらと真逆の極太性器。対を成した二つの魅力がおれの脳裏に深々と焼き付く。馬みたいに大きく立派なものが、ついさっきまでおれのナカに。姉さんの細指では今にも取り落としてしまいそうな煮詰まった白濁が、ゴム膜越しにおれの穴に。おれとシて、使って、襲ってくれて、あんなに沢山射精してくれた。しあわせになってくれたんだ……。

「ねえさん、ちんぽ……♡」

はたと振り返った姉さんは、結ぼうとしていたゴムをぼちょりと取り落とした。液体というよりは、汁気の多い果物が落下したような音におれのペニスがぴくぴくと悶える。丸々と見開かれた両目がおれを見つめる。釘付けになる。小さく開いた唇は何度か確かな形を作ろうとして、そのたびに迷い歪んでうやむやになり、またぽかんと小さな円に戻っていく。そうしているうち、白い喉元がごくりと上下した。

姉さんが凝視する先。指の先まで石のように固まり、ゆらゆらと自慢のモノを上向かせていきながら見つめていた光景。それは、くねくねと腰を揺り振らし、淫乱穴をひけらかして交尾をねだるおれの姿だった。ベッドに踵を上げてまで足をM字に割り開き、ペニスに媚びる惨めな男のへつらいだった。宙にアナルでハートを描こうとする哀れなオスの痴態だった。蠢き蕩ける窄まりの上で、萎え果てたイモムシみたいな男性器が嬉し涙を垂れ流す。

尻の谷間を汁が伝う。晒されたアナルが水音を立てる。変わらず両手が動かせないなかでおれに思い

つく限りのおねだり。心臓が破けそうで、頬から火が出そうで、汗も血もぐつぐつと沸いていく。もしも一歩後ろに引かれようものならおれは死ぬまで立ち直れない。もう二度と姉さんの顔を見れないだろう。でも、無様な腰遣いは滑らかだった。ためらいなく尻を誘い振れた。だって。

「そーちゃんが……悪いんだからね……」

甘い声が鼓膜を震わす。小柄な女体がふらふらと迫る。腰を鷲掴みにする姉さんの両手も、たっぷりと潤んだ瞳も、獲物を前に涎を垂らすいきり勃ったふたなりちんぽも、みんなおれに向けられていたから。ずっとずっと向けてもらえていたんだから。

「このドスケベぇっ♡」

ぐじゅんと濁った音がした。肺から空気が叩き出される。一拍遅れて痙攣が走る。世界が丸ごと暗くなって。

「ひぎぃぃぃっ♡　ねえ、ひゃ……っ♡　おぐぅぅぅっ！」

脳髄が溶け崩れる。反り返った首筋が悲鳴を上げる。膝が勝手にねじくれる。犯してもらえた淫乱アナルが引き攣れたままに纏わりつく。

「あ、ちょっ、そーちゃん……ばかぁ、エッチ、もぉっ♡」

ガタガタと震えるおれの足は丁度姉さんの尻に当たっていた。ハメ倒してくれる腰にしがみつき、挟み込み、恥も外聞もなく甘え縋っていた。姉さんの吐息が荒くなる。ナカのペニスが震え悶える。煮えてほぐれた奥はまだしも、押し拡げられた括約筋は凛々しい竿に悲鳴を上げた。

「りゃえぇ、いりぐひっ、らえっ♡　おかひく、なっひゃ……」

頭にうっすらと靄がかかる。皮膚を舐め尽くすように電流が走る。穴から湧き出すどろどろの熱がおれを丸ごと麻痺させる。あまりに呂律が回らなくて、今にも舌を噛んでしまいそう。

「ふぅん、入り口かぁ」

くすりと姉さんが笑った。上がった口角が、声色にありありと滲む炎がおれの目元を潤ませる。腹の底を窄ませる。まって、ちがうの、と口をついた愚にも付かない言い訳はきゅんきゅん吸い付くナカのせいで建前にすらならなくて。

「このマゾマンコっ♡　おかしく……してあげるっ！」

姉さんが一気に腰を引く。一番締まる括約筋が張り出したカリを捕まえるまで。おかしくされたい入り口が離れないでと懇願するまで。直腸を根こそぎほじ返されて、粟立つような快感が身体中を這い回

る。けれどこれで終わりじゃない。始まってすらいない。息が止まる。喉が詰まる。なけなしの力を振り絞り、おれは歯を食い縛ろうとして。

「ひぎゃぁぁぁぁんっ！　はへぇ、えぇ、やぁ……っ♡」

ごちゅんと突き込む立派な亀頭に至極あっさり打ち崩された。脳天まで抜けるちんぽの衝撃。直に伝わる姉さんの熱。肘がわなわなと震えた。爪先が小刻みに宙を掻いた。だらしなく緩む頬をどうすることもできなかった。

「こんな、ひくぅっ♡　かんじてぇ……おふっ！　おかおも、マンコも、あひゃぁぁっ♡　どろっどろじゃ……ないっ♡」

途切れ途切れに姉さんが叫ぶ。乱暴に腰を打ち据えながらおれの痴態をなじりたてる。ねじ込み、えぐりたて、深々と挿入し、と思えば小刻みに腰をかくつかせる。速度も間隔も滅茶苦茶な穴を貪るだけのピストン。打たれ続けた尻肉がジンジンと熱を帯びてきて。

「いぎぃっ！　ひゃ、あえぇ、ひゃっ♡　ふあぁ……あひぃっ」

一突きごとに敷いたタオルがずれていく。濁った水音が気まぐれに響く。抽送のたびに違う場所を犯される。前立腺を撃ち抉られ、すり潰され、次の突き込みではかすりもしない。ナカを焼き焦がす静電気は溜まって薄れてを繰り返す。膝は笑い、腹筋がつりそうで、力みっぱなしの背筋と手足を痛み交じりの痺れが満たす。荒っぽくて手酷くて、姉さんのちんぽは身勝手だった。存分に穴を味わってしつこくねちこく突き込んでくる。しゃくりあげるしかなかった。涙を零すほかなかった。好き放題に使ってもらえて専用のカラダは滾るばっかり。

「よがりすぎ、くふぅっ！　すけべぇ♡　やっらしい、トロ顔しひゃってっ！　このぉっ♡」

愛らしい罵声が耳たぶを緩ませる。磨かれた爪が脇腹に食い込む。燃え上がる肌に痕が残る。鋭く痛むその曲線はいくらでも刻んで欲しいくらい。

「りゃって、らっれぇ……っ♡　ねぇひゃんが、れえりゃんがぁ……」

激しいから。求めてくれるから。犯してくれるから。いっぱい使ってくれるから……だけじゃない。喉元までせり上がっていた言葉は、荒々しく腰を引き、息を整えた姉さんに塗り潰された。次にやって来るのは当然。

「おほぉぉぉぉぉ～っ♡　ほへぇ、りゃめぇぇ……ぇぇぇっ♡　えぐぅぅぅぅっ！」

有無を言わさぬハメ腰と欲にぐらつく膨れた亀頭。無様な嬌声が迸る。背骨が弓なりに反り返る。瞳

の裏を閃光が焼く。
白目を剥いてのたうち回って、本能まみれの腰振りを骨盤の奥まで叩き込まれて。我ながら、こんなザマで何を、としか思えないけれど……胸が詰まって仕方なかった。きゅうきゅうと音がするほどに、息が出来なくなるくらいに締め付けられて満ち満ちていた。
薄っぺらいゴム膜一枚。あってもなくても変わらない。赤黒い亀頭も竿に浮き出す血管も同じように感じられる。たったの０．００５ミリ。差なんてそれしかないはずなのに。
「んぎぃぃぃっ！　ひゃん、へぇ……ひゃっ♡　ひゅぎぃ♡　ぉんっ！」
直接もらえる。熱が伝わる。遮るものなく繋がっていられる。肉が触れ合う。じかに擦れる。欲に猛ったふたなりちんぽをそっくりそのまま受け入れられる。姉さんとおれが一つになれる。ただそれだけで胸の高鳴りが止まらない。ささやかな違いが痛む手足を絞り上げ、掠れた喉をかき鳴らす。聞くに堪えない鳴き声が内から外からおれを焦がした。
「くぅぅんっ♡　感度……よすぎ、あひゃっ！　でしょ……ほんっとやらしぃ……」
ガシガシと強引に抜き差しながら姉さんは言葉を尖らせる。自慢のモノは二回目なのに鋼のよう。穴を串刺し味わうごとに、おれを泣かせて悶えさすたびに満足気に震えていた。時々当たる陰嚢は大福みたいに大きく重く、今か今かとせり上がっている。孕ませようとぐらついている。唾液が溢れて止まらなかった。尻が窄まり媚びうねった。
「淫乱っ！　ひぅぅ……マゾぉっ！　このハメ狂いっ♡　はひゃあんっ！」
汗みどろの肌がぶつかり合う。じゅこちゅこばちゅんと犯してハメる音がする。ハメ潰されるおれの悲鳴と悦びに蕩けた姉さんの声、けだものみたいな欲塗れの交尾。姉さんの髪が振り乱される。宙にきらきらと水滴が舞う。その奥から覗くぱっちりとした瞳は情けないおれを映していた。泣きじゃくり、鼻を垂らし、無様に呆けてアへ顔まで晒すおれのことを見ていてくれた。小さな顔を目一杯にほころばせ、だらしない笑顔を浮かべながら。
「オスまんこ、変えたげる……くふぅん！　わたしの、かたひに……なりなしゃいっ♡」
びりびりと耳を震わすその声に、おれはにへらと笑みを浮かべた。なんだか面白くて滑稽で、ぐずぐずの頬がふやけてしまった。とっくに姉さんのものなのに。これまでも、これからも、ずっとずっと姉さんだけの穴（おれ）なのに。今までゆっくり少しずつ時間をかけて拡げてもらった、ようやく根元まで挿入るようにしてもらえた、姉さんだけのものなのに。こんなにやらしくなったのにハメる前にはほぐしてく

れる。もう数え切れないほどシてきたのに、今日も固く勃たせてくれる。自分のものだといきんでくれる。息を荒げて声を漏らして遮二無二腰を打ち付けてくれる。少しでも奥までねじ込もうとはしたなく股を開いてくれる。おれに睾丸をなすりつけては股間をぶるぶる震わせてくれる。とうの昔に駄目駄目で、姉さん無しじゃいられないのに。こんなに求めてもらえたらもうどうしようもないじゃないか。心の底まで蕩けて堕ちて、芯まで爛れてしまうじゃないか。どくんどくんと脈打つ胸は今にも壊れそうだった。

「くらひゃいっ、なかぁ……おふに、おぐうぅっ！　くらしゃいっ♡」

ナカが締まってうね返る。ぐらつく欲望にすがりつく。へたれた肉を振り絞り、おれは姉さんに足を回した。奥にぐりぐり突き込む腰をそのまま繋ぎ止めようと仰いで甘えて絡みつく。姉さんの肩が大きく跳ねた。ふたなりペニスがぞわついた。ただでさえぐしゃぐしゃだった可愛い顔がもっと可愛らしくなる。鼻を啜る音でさえおれの目元を熱くした。

「この、このぉっ♡　孕みなしゃいっ！　すけべ、マゾっ、だいすきぃ♡」

腰遣いが変わる。荒くなる。弱々しい足を払いのけるようにピストンが早く小刻みに。ぐちゅぐちゅと、ぶぼぶぼと、卑しい穴が下品に喚く。姉さんのちんぽが奥底を穿つ。掘り進める。穴をえぐる。えぐってくれる。両手で脇腹を鷲掴み、気持ちよくなろうと使ってくれる。沢山射精そうと猛ってくれる。赤く腫れた尻肉に縮んだ睾丸をすり込んで、めろめろにほぐれた腸壁を好き放題に愉しんでくれる。種付けに耽る姉さんはやらしく下劣で浅ましく、おれのアナルをときめかす。頭の芯をとろめかす。交尾の熱にあてられたのか身体の中が泡立っていく。ぱちぱちと、ふつふつと、血肉も骨も溶けていく。

「ばかぁ、へんらぃ、すきぃ……ぐうぅっ♡　あぎぃ、あぐぅ……おひっ♡」

かき回されて粘つく汁が繋がったところから漏れ落ちる。ハメ腰はみるみる勢いを増し、同時に小刻みで忙しない。殆どおれに張り付いたままひっきりなしに奥を叩く。亀頭の張りが手に取るよう。陰嚢のシワを尻肉に感じる。激しい脈が伝わってくる。視界は曇りガラスで覆われているのに、姉さんの吐息は鮮明に届いた。身体にしたたる汗の雫が脳髄にまで沁みていった。

「しゅひ、しゅきぃ♡　れえひゃ、やいしゅきぃっ」

ずこずこと響く姉さんのちんぽ。窄まりを潤す先走り。必死で夢中な腰裁き。おれを根こそぎ煮蕩かすには、素朴な本音を引っ張り出すには、それらは十分過ぎるくらいで。

「い、あ、あぁ……いぐぅっ！」

姉さんに痙攣が走る。華奢な女体が、ごつごつのペニスが、無防備に惚けた小柄な顔が一瞬ぴぃんと張り詰めて。

「〝お〝お〝お〝お〜〜〜っ♡」

おれのナカで弾けて散った。堰を切り、迸り、でろりと濃ゆい種汁が媚びたまんこを押し流す。腸の底まで染め尽くす。下腹が膨れる、腫れ上がる。火傷しそうに燃え上がる。げっぷが出そうな圧迫感。目の前が割れ崩れる崩壊感。歯の音が合わない。頭が煮える。狂ったように心臓が暴れる。壊れたみたいに足がわななく。孕ませ腰に抱き縋り、淫らに惨めにガクガク震える。ベッドに沈み墜ちるようで、身体がふわつき浮き上がるようで、いてもたってもいられない。

「〝い〝いっ！　あび、ひあぁ……っ♡　おぅっ♡　まら、れうぅ……！」

ばちゃばちゃと精子が腸を打つ。次から次へと溢れ出す。豪快に注がれる白濁は、小さな穴をあっという間に埋め尽くしてなお止まらない。そして、奥へ奥へとねじり込んでくる欲張りな根元が入り口に固く蓋をしていた。だからどろつく種汁がナカを貪り喰い付いてくる。行き場をなくした特濃精子が内からおれを押し拡げてくる。

瞳を必死に凝らしてみると、姉さんは目一杯に背筋を反らせて身体中を震わせていた。全身で種付けを噛み締めて、時折ぶるりと波打っていた。脇腹にがっしりと食い込む指はわたしのものだと刻み込むよう。だらしなく零れる嬌声は幸せの色で満ちていた。どうにか凝らしたおれの両目は、すぐに潤んで見えなくなった。

脈打ち、噴き出し、心が漏れる。汗が垂れ落ち、息が切れ、肌が赤く燃え上がる。姉さんの熱が伝わってくる。頬を涙が伝っていく。ごく短いはずの絶頂が随分と長く感じられた。多分、本当に長かったし、きっとそれだけじゃなかったんだろう。固く引き締まった睾丸がゆるゆると解けて垂れ下がっていくまで、欲情ちんぽが精を吐き切り太さと固さを手放していくまで、姉さんとおれは一つでいた。隙間なく、隔てるものなく、ぴたりと繋がり合っていた。滾る血潮が静まるまで、高揚が気怠さに置き換わるまで、離れることなく一緒のまま。どこまでがおれで姉さんか、曖昧になっていくようだった。

「ひ、ひぐぅ……うぅぅ……♡」

情けない声を漏らしながら姉さんがおれから抜けていく。本能を根こそぎ吐き散らし、満足気に弛緩したペニスがぬめったナカを遡る。緩んだ、といっても固めの豆腐くらいの感触はあったし、中出し直後のマゾ穴にとっては十分に凶悪。そんなわけでおれが上げた鳴き声のほうがよっぽど聞くに堪えなか

ったし、泡立った種付け汁をぶぼぶぼと尻から垂れ流すさまはきっと下劣そのものだった。でも、目を瞑る気にはならなかった。口を閉じようともしなかった。ハメられ好きも淫らさも、極太ちんぽが抜けていくごとに薄濁ったカウパーを漏らす短小ペニスも、別に隠すことは無いんだから。

「あふ、ふあぁ……ぁぁ」

ため息とも声ともつかない音と共に、姉さんがおれの隣へ身を投げ出す。無造作にいい加減に、丁度添い寝をするように。ぐったりと伸びたおれの身体を決して下敷きにしないように。……どうせ小柄で軽いのに。こんなに雑に倒れ込んでもベッドは小さく軋むだけ。不釣り合いな股間のほかは絵に描いたようなたおやかさなのに。痛いはずも重いってことも、嫌なわけも無いっていうのに。

「……だぁいすき♡」

耳に唇を感じた。鼓膜を吐息が撫でた。毛先が首筋をくすぐった。姉さんの言葉がまぶたを焼く。静まり始めていた頭が一瞬で沸き立つ。唇を動かそうとしたけれど、喉に力を籠めたけれど、おれは限界だったらしい。優しいぬくもりに溶け溺れ、目の前がぼんやりと白んでいく。最後に微かに感じたのは、頭を撫でてくれる手のひらだった。

泥の中を漂うような掴み所のない意識の中で、最初におれが感じたのは慣れ親しんだ匂いだった。鼻がひとりでにすんすんと鳴る。捌きたてのイカ、満開の栗の花、梅雨開けの夏日に茹でられる草むら。その影に隠れた酸っぱい汗とシャンプーの甘さ柔らかさ。湿り気を帯びたバスタオル、手首を撫でてくれる指先、かき乱されたシーツの感触。肌が捉えたあれそれが寝ぼけた頭に広がっていく。重怠いまぶたをどうにか持ち上げてみると。

「あ、起きた？」

すぐ目の前にあったのは紅茶色の瞳だった。汗と涎で化粧が崩れ、それでもなお誰より可愛らしい笑顔だった。無防備なおれを見つめて手を繋ぎ、姉さんはのんびりと寝そべっている。目線が狼狽え情けなく泳ぐ。

「ん、うん……沢山出したね」

ただ、思わず口をついた言葉はもっと恥ずかしかったかもしれない。尻から漏れ出している種汁と股ぐらに感じる濃ゆい粘り気、腹の奥でごろごろと鳴る精液、そんなものにばかり気を取られていますと宣言したも同じなんだから。

おれの返事に姉さんの両目が丸くなる。くすくすと笑うかと思ったけれど、誇らしげに頷くさまが浮かんだけれど、姉さんはくしゃりと唇を歪めた。汗ばんだ頬を引き攣らせた。

「あ、ごめんっ！　待って、今拭いて、や、先に換気……」

わたわたと身を起こす。戸棚のウェットティッシュに手を伸ばしかけ、すぐさま取って返して今度は窓へ。泡を食った姉さんの手首をおれは咄嗟に捕まえた。縛られるのは嫌いじゃないけどやっぱり動けるほうがいい。こうして繋ぎ止められるから。言葉じゃなくても伝えられるから。

「いい、平気……一緒がいい」

枯れた声に姉さんが固まる。力無いおれの右手に姉さんは肩を跳ねさせる。振り返った表情にはありありと迷いが浮かんでいた。

「や、でもその……嫌でしょ？　お尻ぐちゅぐちゅだし、部屋中臭いし……」

目を伏せながら姉さんは子供みたいに縮こまる。呼吸のたびに湿り気を感じる。タオルやシーツのあちこちから青草の匂いが立ち上り、おれたちの周りをむんむんと漂う。このままこうしているだけで身体に染み付きそうだった。おれは大きく深呼吸をした。掠れた喉を振り絞る。

「好き、姉さんの匂い。一緒にいたい」

二人きりの寝室におれの言葉はしんと響いた。姉さんの瞳が僅かに広がる。口紅を滲ませた唇が小さく開く。どくん、どくんと鼓動を感じた。蕾がほころんでいくように、もみじが色付いていくように、可憐な頬はゆっくりと華やいでいって。

「そーちゃんっ」

気付いた時には、おれの顔はなだらかな胸元に埋もれていた。華奢な細腕が頭を抱き寄せ絡みつく。汗ばんだ素肌がぴたりと触れ合う。額に姉さんの鎖骨を感じる。でろりと太いふたなりペニスがぐりぐりと腹に押し当てられる。儚い身体に腕を回して優しく優しく抱き返す。足も絡めて縋りつく。やっときちんと抱き合える。繋がらないまま一つになれる。もぞもぞと蠢き姉さんを見上げた。姉さんもおれを見下ろしていた。視線が交わる。見つめ合う。トクトクと胸が甘鳴った。

「へへ、えっへへ……だいすき♡」

明るい声がこそばゆい。まばゆい笑顔が温かい。おれは何も言えなかった。緩やかな丘に顔を埋める。頬の火照りをおずおずとすり込む。ただそれだけしかできなかった。他にはなんにもいらなかった。

# プロフィール紹介

和泉（いずみ）

身長　152センチ

チン長　13センチ（非勃起時）

好きなもの　壮治、壮治とのセックス、オナニー、お洒落

嫌いなもの　不意の勃起、一人で過ごす賢者タイム、可愛らしい女性用下着

一人暮らしを始めるとき、両親には友達が来たときのためと言い張って来客用の布団を買った。なけなしの貯金をはたいたらしい。ただ、実際には壮治と同衾するようになったので収納の肥やしと化してしまっている。

壮治（そうじ）

身長　181センチ

チン長　本人たっての懇願により非公開。和泉以外には知られたくないらしい

好きなもの　和泉、料理、ハーブ栽培、調理器具の手入れ

嫌いなもの　掃除、スポーツ、「ふたなり女とかマジ無いよな～」と言い放つ人間

調理師学校への進学をぼんやりと考えている。和泉のマンションから通える学校が無いか、時折探しているらしい。

# 姉の日々

小鍋の茶色い液体をかき混ぜるごとに、ほっと気が緩む甘い香りがキッチンに立ち上っていく。ペースト状に練り上がってきたそれに牛乳をちろちろと注ぎ込みながらおれは背後の様子を窺った。

全裸にYシャツ一枚を羽織っただけの姉さんは渋い顔で鏡を眺めている。いや、ここからだと顔は直接見えないけれど放っている空気からありありと表情が伝わってくる。

「あー、やっぱ滲んじゃってる。あぁう……」

肩越しに聞こえてくる独り言は、一人暮らしを始めてからついた姉さんの癖だった。家での会話が少ないとついつい声が出てしまうらしい。まあ、今は独り言にさせたりしないけど。

「別にしなくて良かったでしょ。どうせコンビニだけだったし」

目分量で牛乳を注ぎ終え、手元が自由になったおれはそのまま姉さんを振り返る。キッチンから食卓を挟んで向こう側、壁際の鏡台に向かう姉さんは口紅を拭い落としている最中だった。白いふわふわとしたもの、確か専用のコットンだったか。それを何やら液体で湿らせ、丁寧に慎重に唇を拭いている。落とすのにあんな手間暇が必要なら、付けるのだってきっと面倒だろう。姉さんはそのままでも可愛いのに……と口をつきそうになった言葉は、息を吹き返していた理性にすんでのところで羽交い締めにされた。

「なに言ってんの。腕組んで歩くんだよ？」

ぴしゃりと切って捨てられる。取り付く島がどこにもない。汚れたコットンをゴミ箱に放ると、姉さんは新しいコットンを目元に当てた。

「そーちゃんが恥かいちゃうでしょ。だらしない女連れてる～って」

当然とばかりに言い切ると澄ました顔で化粧を落としていく。鏡を見ていてくれて助かった。おれが思わず目を丸くしたのに、きっと姉さんは気づかなかっただろうから。

目元を拭い終えた姉さんがぱたぱたと洗面所に向かうと、リビングキッチンにおれ一人が取り残される。じんわり上がった額の温度を振り払おうと右へ左へ視線をうろつかせた。マンションに戻ると同時に寝室に連れ込まれたから気づかなかったけれど、リビング隅のPCデスクには女性向けのファッション雑誌が何冊も置きっ放しになっている。鏡台の隣に置かれたタンスはよくよく見るといくつかの引き出しが開いたままだ。クローゼットも半開きで中の様子が窺える。何度も何着も服を出し入れしなければ

あんなに乱れはしないだろう。額どころかこめかみや喉元も熱を帯びていくのがわかった。
背後から届いたコポコポとした音に肩が跳ねる。牛乳のことを思い出し、おれは慌ててコンロの火を止めた。

「ココア、入ったよ」
丈の余ったYシャツを翻しながらリビングに戻ってきた姉さんは、その一言でぱっと顔をほころばせた。サイズが合っていないのはいつものようにおれから無理矢理剥ぎ取ったものだからだ。おれが袖を通した寝間着は、ここに預けておくうちに姉さんの匂いが付き始めている。ただでさえ汗も匂いも肌に残っているのに、服からも姉さんを感じてしまってどうしたらいいのかわからない。
「ありがと、そーちゃん」
その上、姉さんはまっすぐにおれを見上げて笑いかける。いそいそと椅子に座り、薄い手のひらでマグカップを包み込み、立ち上る香りを味わってくれる。簡単な飲み物を作っただけなのに、目元を緩ませにへら笑いを浮かべてくれる。
「……おれこそ、ありがと」
だからおれの声はか細かった。暖かい視線を受け止められない。耳の周りがむず痒い。頬杖をついて顔を逸らす。ココアは少し熱かった。頬が赤くなるくらいには。
息を吹きかけちびちびと啜り、味わっては小さく息をつく。何を話すわけでもなく何をしようとするでもなく、食卓に二人でただ過ごす。無為に流れる貴重な時間。無意味でいていい大切な時間。おれの好きなひとときだった。でも。
「ねぇ」
流れる時間は冷ましてくれた。熱いココアもおれの頭も、ぽつりと零れた声色も。
「ん～？」
気の抜けた声が返ってくる。おれは軽く身じろぎをした。程よい言葉を選びたかった。鋭すぎず固すぎず、そっとつつけるくらいがいい。
「確かにさ、そういう恥はかかなかったよ」
姉さんはいつでも可憐で素敵だ。それとお洒落は別の話。そして、お洒落とはまた違う話もあった。視界の隅で捉えた姉さんはぎこちなくおれから目を逸らす。

「でもおれ、今日、多分もっと恥ずかしかったんだけど」

頬杖をついたまま姉さんを見やる。じっとりと睨みつける、の四歩か五歩は手前の目つき。でも姉さんは面白いくらいに目を泳がせた。せわしなく指を弄び、吹けもしない口笛を吹こうと唇を尖らせる。しまいには白々しくマグカップに手を伸ばし、飲み干す勢いで傾けた。

「うん、美味しい！　持つべきものは甲斐甲斐しい弟だねぇ！」

ありがとありがと、なんて大げさに言い連ねる姉さんを眺めながらおれもマグカップを持ち上げた。とろりと広がる甘い味。口を満たすそれはさっきよりも濃いような気がした。きっとココアが冷めたからだ。それか、舌が熱さに慣れてきて味を感じやすくなったんだろう。なんとも自然な現象だ。目の前でわたわたしている姉さんは別にちっとも関係ない。仕方ないなと思うだけだ。姉さんが可愛いことなんて、いつも通りの当たり前なんだから。

続きは製品版にてお楽しみ下さい！